

令和4年度第3回調布市社会教育計画策定ワーキンググループ会議

- 1 日 時 令和4年7月26日（火）午後2時00分から午後3時30分まで
- 2 会 場 調布市教育会館3階301研修室
- 3 出席者 9人
篠崎議長，宮下副議長，荒井委員，進藤委員，田村委員，西牧委員，福田委員，新田委員，矢幡委員
- 4 事務局
社会教育課長，社会教育課職員4人
東部公民館長，北部公民館長，図書館副館長，武者小路実篤記念館事務局長

○篠崎議長 それでは、ワーキンググループ会議を始める。

○事務局

配付資料を御確認いただきたい。

資料1 アンケート結果 速報値，資料2 現行の調布市社会教育計画に係る取組実績及び成果シート，資料3 社会教育計画素案の案である。資料の不足はないか。

はじめに、7月21日（木）に開催された図書館協議会について報告する。

次期調布市社会教育計画の策定方針（案）及びアンケートについて説明し、意見を伺ったところ、委員長から社会教育計画策定後に報告をしてもらいたいという話があった。そのため、計画策定後に報告に伺う旨を伝えた。なお、委員の皆様からは他に意見等はなかった。

資料1は、7月5日から19日まで実施したアンケートの結果である。こちらの資料は、ロゴフォームというアンケート機能で出力した速報値となっている。一部見にくい箇所があるかと思うが、参考までに御覧いただきたい。今回は、237件の回答があり、内訳としては88件が個人、149件が団体となっている。また、資料について補足がある。ロゴフォーム上で、問8の選択肢17から20が選択できない状況になっていたため、集計をし直したところ、17の「障害当事者または関係団体」が3件、18の「外国人の社会活動への参加促進」が1件、19の「特にない」が6件、その他が8件という結果になった。

この資料は、このあと、議題について話し合っていたく際の材料として御活用いただきたい。報告事項は以上である。

○篠崎議長

それでは、図書館長に伺いたい。図書館の将来構想的に、図書館について、社会教育計画に載せたい事項はあるか。

○図書館

今後図書館に求められる課題として電子書籍の導入などがある。今回の計画の中でどうこうということはないが、図書館の目的が実現するのが社会教育計画の形であると考えている。

○篠崎議長

図書館はいろいろな側面があるから図書館は予算がかかる。そういう部分のところで、デジタル化であるとか、最終目標としてはどういう方向に行くのか。図書館の利用方法の変化など、基本的な方向性があれば伺いたい。図書館の機能すべてが全国的に変化しつつあるが、調布市の図書館としてどのように対応していくのか。基本的な所が知りたい。

○図書館

今後、図書館が形として存在し続けていくのかということについて話をさせていただく。図書館が扱ってきているアイテムが変わってきている。この変化に合わせて変化していくことは必要であると考えている。市立図書館は、地域住民の学習を様々な方法で支援している。社会教育計画的に言えば、学びをどのような形で保障していくのかについて、図書館だけで考えるものではない。相対的に擦り合わせて考えるものである。社会が変わっていく、人々が変わっていくことを先取りすることは難しい。行政的には、施設的な整備は計画的に行っていく必要がある。直近では、分館2館の更新が決まっており、計画に反映させている。

○篠崎議長

だいたいの方向性を示していただいた。社会教育委員として考えた場合、若い人達が、スマホで全てを完結させたいというような人が相当増えている。我々の世代の人はそういう風にはならない。現実的にはデータの処理の仕方も変わってきていると思う。そのような見方に対する方針は決まっているか。

○図書館

世の中がデジタル化していくことに合わせた対応は必要である。スマホで何でも済ませられるように思うが、本当にそれで全てが見えているのか。2回くらい画面展開して、無ければ世の中に存在しないというような風潮があるが、情報とはそういうものではないことを示していきたい。見つけられない情報に可能性があるというアプローチがあると思う。例えば、国会図書館が、一部の本をタブレットで見ることができるようにしたが、それが国会図書館の本の全てではない。これには、個人的な意見も含まれているが、以上である。

○篠崎議長

委員の方々はいかがか。図書館だけでなく、どうか。

○事務局

議題についての説明がまだであるため、説明させていただきたい。資料2は現行計画の取組状況についてまとめた資料となっている。社会教育計画に掲載されている事業が、計画に掲載されている順に記載されている。令和4年度の取組結果については、まだ分からないため、資料としては令和3年度までの9年間とさせていただいている。資料3は、ワーキンググループ会議発足前に委員の皆様からいただいた御意見と、担当部署がこれまでの経過を踏まえて、現行計画の第2章4基本となる施策の記載を今後の取り組みに書き換えた計画素案の案となっている。下線が引かれた箇所が変更箇所である。また、第3章については、現在作業をしており、まだ素案が作成出来ていない。次回のワーキンググループにて、お示

しいたしたいと考えている。この資料をもとに、今後の取組や文言について、議論いただき、反映していければと考えている。

また、本日、社会教育関係課を呼んでいるため、紹介させていただく。

～各課代表者紹介及び挨拶～

○宮下副議長

事務局から示していただいた資料について、順に見ながら皆さんの意見、質問を募りたい。まずは、資料1アンケート結果から見ていきたい。現段階で、事務局として何か分析はあるか。

○事務局

担当として、感じたことを申し上げる。問6活動目的について、前回の結果と比較すると、大きな変化はないように思う。今回、教育の格差是正、高齢者の介護予防、障害当事者又は関係団体についての回答が多めだった。また、問8について、今後取り組んでいきたいテーマとして、人権の尊重、男女共同参画社会、環境保全、生活困窮者への支援というところに興味を抱いていることが見てとれる。問9団体が課題解決のうえで支援してほしいことは何かという問いでは、施設の充実が圧倒的であった。問2と問11をもとに、年代別の興味の方向性がみてとれる。問12では、個人の利用する施設として、たづくり、図書館が圧倒的だった。問14の興味のあるテーマに関してで多かったのは人権尊重、環境保全、生活困窮世帯の支援、障害当事者が多かった。今活動している団体のテーマとはまた違ったところにあるように思われる。活動参加へのきっかけは、活動を知る機会というのが6割。今後の働きかけの参考になるのではないかと感じている。

○宮下副議長

参考になる意見をお寄せいただいた。意見はあるか。

○矢幡委員

場所が不便、施設の充実について、前回のアンケートでも同じような結果になったのではないか。役所として、その辺りをどう考えているのか知りたい。

○事務局

市の考え方として、建物は大事に使っていくことが大前提である。公共施設の複合化、民間活力の利用による更新、民間に委託するといった考え方がある。どんどん物を増やしていくというのは、人口減少の観点から現実的でないという面もある。

○矢幡委員

素案の中には、そういったことについて言及されていない。今まで同じような意見が上がっている。人口減少するとはいえ、このことをどう考えるか。

○宮下副議長

問13で個人回答者が施設を利用していない理由として、場所が不便、使える日時が限られているといった回答が多い。このことから方向性がみてとれる。

○荒井委員

問16, 社会教育行政についての問い。「わからない」という回答が多いことが気になる。興味があるのに、社会教育を調布市がやっているかどうかわからない、見えていないというのはもったいない。社会教育は自然と身につけているが、社会教育という言葉がわかりづらい故に見えていないという傾向がみてとれる。

問7, 活動していくうえでの課題に関する問いがある。その他と回答した人の具体的な内容について知りたい。

○宮下副議長

問15で、活動参加のきっかけとして、知る機会と回答した人が多い。団体の活動や行政の施策を知ってもらうことは課題である。

○事務局

その他については、集計作業が整っていないため、次回の会議でお示しする。

○進藤委員

障害に関する興味が多いことに驚いた。団体に参加していない人の興味が障害に寄せられている。障害を持つお子さんを持つ保護者や大人になって障害者となる場合もある。障害に関する講座が実施されると良いと思う。

公民館の館長に伺いたい。一般の人が障害について知る講座は行っているか。

○北部公民館

今まで積極的には実施してこなかった。今年度、予算を確保し、企画しているところである。

○進藤委員

10年前の計画でも、障害はテーマとして挙がっていたように思う。福祉で企画しているものはあるが、公民館でも企画してはどうか。西部公民館では、障害のあるお子さんも参加できる講座(もくもく)がある。障害とは何かを教えるのではなく、一緒に活動しながら障害理解を深めていくことが大切なのではないかと思う。このことは、計画に活かしていきたいと考えている。

○宮下副議長

個人回答者で障害に興味関心のある人は多いが、障害に関する団体は多くはないのが現状である。団体を作るよう働きかけることは難しいだろうが、方向づけを公民館の施策や社会教育課の施策で活かしてはどうか。

資料2から障害当事者を対象とするもの、障害理解を促すものはこの10年間多くはなされていないのかもしれない。

○新田委員

祭ばやしが郷土博物館の担当になっていることがわかった。後継者の育成を支援するとあるが、予算を増やすということで良いか。あまりに補助金がすくなくすぎる。

○事務局

本日、郷土博は来ていない。後日確認する。

○新田委員

基本的な考え方を全く触っていないのはいかかなものか。30年、低成長に入って日本経済が良くなるということは基本的にあり得ない。そういう日本の状況の中で、税、人口の減少、温暖化など地球環境もおかしくなる。アンケートの回答にあまり左右されず、今後4年間で、行政が一体市民の方に何ができるのか示すべき。できる範疇は限らざるを得ない。その中でどのような行政サービスができるか考えなければならない。今の調布が置かれている状況を踏まえた表現を基本的な考え方に記載し、それに基づいて各論に入っていないといけない。

○宮下副議長

資料3の素案。第1章に関しては、この場での議論をこれから反映していくことになる。新田委員の意見をもとにアンケートを見てみると、問8の団体の回答も問14の個人の回答でも人権、環境、男女共同参画、障害の問題もこれから踏み込むべき課題と見て取れる。

○新田委員

行政ができる範囲は小さくなっていくことは間違いない。自助・共助が増えざるを得ない。行政は特化するところを示す必要がある。

○宮下副議長

その通りである。一方で、社会教育計画は市民参画で作られている側面が強い計画である。具体的な事業でなくとも、1章で方向性を示していくことはある程度可能なのではないか。行政施策として人権、環境保全など、社会教育の範囲だけでなく、市の方向性はどうか。

○事務局

社会教育計画なので、一定程度社会教育に特化した内容とさせていただきたい。基本構想や教育プランを新たにしようとしているところである。まだ検討の段階で、特にお示しできるものはないが、今後素案として案が提示され、その中で市の考えは示されると考えている。

○進藤委員

8月24日に市長に基本構想の素案が提出されるため、9月頃には見られるのではないかと。基本構想の福祉や教育の分科会で言われているのは、自主的な学びから、仲間同士の自然な共助が生まれるのではないかと、そのような場づくりに力を入れるのが良いのではないかとされている。アンケートで、どのような学習テーマに興味があるかとの問いへの回答については、行政に何かして欲しいというよりは、情報を知りたいという意味と思われるため、その興味のあるテーマごとに学び、自然に共助につながるという方向で計画に記載しても良いのではないかと。

○宮下副議長

以前、関東甲信越静社会教育研究大会で牧野先生が話されていた共助の仕組みがうまく

機能しているところには社会教育が根付いているという話と重なる。社会教育に力を入れていけば、自然と共助に良い影響が生まれるという話を思い出した。

○宮下副議長

問7で課題が出てきている。公民館でどういう支援がなされているか。

○東部公民館

高齢化、固定化について、公民館でも課題として認識している。会員数の減少や後継者不足について、バックアップをしている。克服しながら事業を進めていかななくてはならないと感じているところである。

○北部公民館

支援をしている。合唱はコロナ禍でかなりの制限を受けている。具体的な講座を実施しながらグループ化を支援している。

○東部公民館

講座を実施、サークルの結成を促し、団体を育成している。

○宮下副議長

サークル結成のもとになるのが公民館の講座という事であれば、そのテーマ設定において、障害など、これまでに取組がなかったような領域にも幅を広げていくことが課題か。

○北部公民館

障害に関する講座などはこれまでは単発で行ってきた。今まで取り組んでこなかったテーマの講座、方向性を示していければと思う。

○宮下副議長

I Tの活用について。I T活用の課題をサポートする時に、公民館や図書館など、どういったところにサポートをお願いすると上手くまわると思うか。図書館はI T化は大きな課題と思うが、対応してきた経験から、社会教育全般に貢献できることはあるか。

○図書館

今現在その力があるかは難しいが、東部公民館では、スマホ講座を行っている。スマホを使って図書館の本を探したり、予約したりする講座で評判が良かった。単にスマホの使い方というより、具体的な使い方について需要があると感じた。図書館の使い方講座の中にI Tに関する情報を入れていくことも考えられる。これまでは情報検索の仕方などは取り組んできている。アイデアはあるが、コロナの影響もあり、進められていない。

○進藤委員

社会教育施設を高校生などの若年層が使用していない。スマホ講座の講師としてCAPS利用の高校生や電通大生に来てもらうのはどうか。高齢者と若年層のふれあいの機会にもなり、若年層が社会教育施設を使うきっかけにもなる。

○北部公民館

公民館3館でシニアを対象にしたスマホ講座を都との共催企画で、学生ボランティアが講師の補助をする事業を企画中。若い世代を公民館に呼び込む方向性は大切にしていきたい

い。

○宮下副議長

問12に個人の方でよく利用している施設で図書館が上がっている。図書館は、コロナ禍で来館者の傾向に変化はあるか。

○図書館

もともと図書館は、年代は問わないように作ってきている施設。ここ2年ほどはコロナの影響で分からない部分があるが、以前は来館者の傾向が、勤労世代のうち40代、50代が増えてきていた。コロナ禍で生活が変わり、その層が増えてくるのではないか。調布は11館図書館があるので、その強みを生かし、学びなおし支援を展開することも出来るかと思う。

○副議長

実篤記念館は資料をデジタル化してネットで公開したりしている経験を公民館に還元するなどの取組は考えているか。

○実篤記念館

現状ではないが、ICT教育における遠隔地の学校対応に力を入れている。東部地域の学校は利用が多いがその他の地域は学校授業としての利用がない。学校教育向けのICT教育の素材を用意している。そういったものをシニアに還元することはできると思う。

○宮下副議長

資料2について御意見はあるか。

公民館の事業として、家庭教育事業がこれだけ実施されている。課題や、今後の展望を伺いたい。公民館事業全体で構わない。9年の反省等。

○東部公民館

公民館では、様々な事業を行っている。公民館運営審議会の中で、報告し、委員からの意見をいただいている。また、社会教育委員の会議でも報告し、ご意見を伺っている。

コロナ禍で事業がすすめられない中で、オンラインの活用をするほか、どのように集うことができるのかを考えている。防災も課題。話が様々になったが、意見を取り入れ、取り組んでいる状況。

○図書館

人が集まることを求める傾向はあると思う。バーチャルとリアルをうまくつなげていくことが今後の課題。特に子育てとなると、人間と人間が触れあるということが必要。子どもの読書活動の推進では、交流が一番大切なため、ここをどう実現するか。課題であり、必要なこと。

○実篤記念館

若い人をどう取り込んでいくかというのが10年のうちの一つの目標だった。平成29年にオンラインゲームとのコラボがあり、20代の来館者が爆発的に増えた。根強いリピーターも多い。興味関心をつなげていくツイッターやホームページでの広報発信に取り組んでいく。リアルとバーチャルであれば、実篤記念館としては、美術品や原稿などのオリジナ

ルの訴えるものが我々の核。バーチャルで体験してもらいつつ、やっぱりリアルに来たいと思わせたい。

○事務局

地域のつながりが希薄化している。地域のつながりがこれまで防災やセーフティネットになっていたところが、希薄化している。具体的な問題として人が集まらない。高齢化が進んできている。これまで地域を担っていたメンバーが高齢化し、反動として人が集まらなくなっている。また、施設の老朽化など、複合的な問題が軋みとして出ている。問題認識はあるが今後どうつながっていけばいいのかわからないというのが、行政も苦慮しているところ。そこを地域学校協働本部などの仕組みを導入することで、昔自然にあった地域のつながりがある意味人工的に維持していくことをどう考えればよいのか、社会教育行政に携わる者として苦慮するところである。

○篠崎議長

メタバースやZoomなどある意味違う世界に入るという、リアルで会うのと違う形であれば、高齢化してもつながることができる。リアルでは会えないけれども、ためになる時間を作ることができる。そちらのやり方を工夫していくことがこれからの高齢化社会には大切。図書館長から40代、50代が増えてきているという話があった。図書館は天国のような場であるから休養で使っている人が多いのではないか。見方を変えれば、それは重要なニーズとも考えられる。高齢者は、社会の力になると考える。おもちゃの病院、カブトムシ博士、子どもとの交流、など全国的にある。自分の持っている楽器を若い子に貸して、交流するなどもある。昔と比べて全く違う新たな交流が生まれている。ネットの世界では、新たなもの、新たなつながり、新たな社会が生まれている可能性が高い。知恵を絞れば何とかなる。若い世代とつながりのある西牧委員はどうか。

○西牧委員

電通大の学生が社会福祉協議会で障害者向けのコンピューター操作の講座の講師をしている例などはある。民間が、居場所や学習支援を行っているため、そこと上手にリンクできないか。図書館、公民館は利用者を広げたいと考える一方で、そこを利用した方が幸福になれるのに利用していない人達が利用できていない。この隔たりをどう埋めるか。

利用できないことで本人が苦勞しているのに、どう利用につなげていけばよいかわからない。読み聞かせの経験があまりない子どもは、国語が不得意という傾向がある。幼少期の体験の差がその後の差につながってしまっている。施設を利用できていない子たちをどう施設にアクセスさせるかが課題。現在使えていない人たちが社会教育施設にアクセスできるようになれば社会教育は豊かになる。

○篠崎議長

今、子どもには、女性の言葉が耳に入る時代になっている。男性の言葉が耳に入らない。慣れていないから。子どもの頃からずっと女性の言葉だけを聞いているとそのような傾向になるのでは。

○荒井委員

下の息子は国語が苦手。子育ての環境が上の子と下の子で違う。下の子には読み聞かせをしていなかった。

○新田委員

資料2。A B C Dの評価を載せてほしい。それに基づいてこれからどうするか検討する。教育委員会がしていることは評価してオープンにしている。

指導室に訊きたい。10年間、善悪の指導できたのか。これまでちゃんとできたから、今後の計画も文言を変えていないのか知りたい。実篤記念館は、河野通勢さんが素晴らしいので企画展をしてPRしてほしい。

○事務局

評価に関しては調べる。主要事業だけ、公開しているかもしれない。

○新田委員

社会教育施設は、市民のニーズに答えられなければ淘汰されなくなっていく。職員は意識をもって仕事していると思うが、主役は市民であるため。それが社会教育の考え方である。公民館を守ろう、図書館を守ろうというのは本末転倒で、どれだけ市民に役に立っているかという話なので。

○篠崎議長

ご意見が無いようであれば今日はこの辺りで終了する。今後も御協力をお願いします。

○事務局

御意見について、今週中にメールをいただければ対応する。

次回は8月16日、教育会館302研修室。

○宮下副議長

ありがとうございました。

資料が多くなっているが、それぞれお考えを聞かせてもらえれば。